くるめ歴史ストーリー　戦国時代

戦いの山　高良山

九州戦国のクライマックス
―16世紀後半―

16世紀後半の九州は、豊後の大友、肥前の龍造寺、薩摩の島津による、「三国志」ともいうべき群雄割拠の時代であった。

天文19年（1550）、大友宗麟（義鎮）が家督を継承する。大友氏は、豊後大分を拠点に、筑後を含む周辺地域を勢力下に置いた。宗麟は、西国の覇者・大内氏が滅亡すると、国際都市・筑前博多を押さえ、九州6か国を掌中に収め、一躍、九州最大勢力へと成長した。

時を同じくして、大内氏を滅亡に追いやった毛利元就が関門海峡を越えて九州進出を図り、また肥前では少弐氏に取って代わった龍造寺隆信が勢力拡大を狙っていた。さらに薩摩の島津義久が急速に北上を進め、遂に天正6年（1578）、大友勢と日向高城・耳川で衝突する。

この大友勢の大敗を機に、筑後には肥前から龍造寺勢が侵攻し、南から島津勢も迫った。やがて筑後は、九州戦国の激戦地となる。

武装する高良山

戦国時代の筑後は、長く大友氏の影響下にあって、「国人」という領主たちが、それぞれの地域を治めた。有力な15の国人は、「筑後十五城」と呼ばれ、なかでも宗教的権威を核とする高良山は、異彩を放っていた。

高良山は、古代より宗教的な山として祀られ、山中にはいくつもの寺社が設けられた。筑前から肥後へ、肥前から豊後への道が交差する軍事上の要地にあたり、山頂やその周辺にはいくつもの城が造られた。防衛上、現在のような森林はなく、何より展望のきく高良山に、戦国武将たちは代わる代わる陣を敷いた。たとえば大友宗麟、その重臣・戸次道雪や高橋紹運、龍造寺隆信、鍋島直茂、そして豊臣秀吉である。

高良山の寺社の人々は、座主を頂点に結集し、一大勢力を誇った。この高良山衆は、宗教組織であるとともに、自ら武装し戦う軍事組織でもあった。

高良山をめぐる争い

高良山争乱のはじまり

高良山衆は、大友方として幾度も戦陣に馳せ参じ、軍功を収めた。天正6年（1578）の耳川の合戦には、高良山座主良寛を始め、多くの人数が出陣した。しかし、大友方が大敗を喫すると、高良山では良寛の弟・麟圭が龍造寺方に翻り、兄から座主の地位を奪い取った。

良寛（大友方）vs.麟圭（龍造寺方）

大友宗麟は、高良山を龍造寺勢力から奪還するため、戸次道雪や高橋紹運ら重臣を筑後へ送り込む。結果、良寛は高良山に復帰、麟圭は高良山から久留米城に移り、大友勢の攻撃に耐えること3年、ついに陥落することはなかった。

九州戦国の激戦区

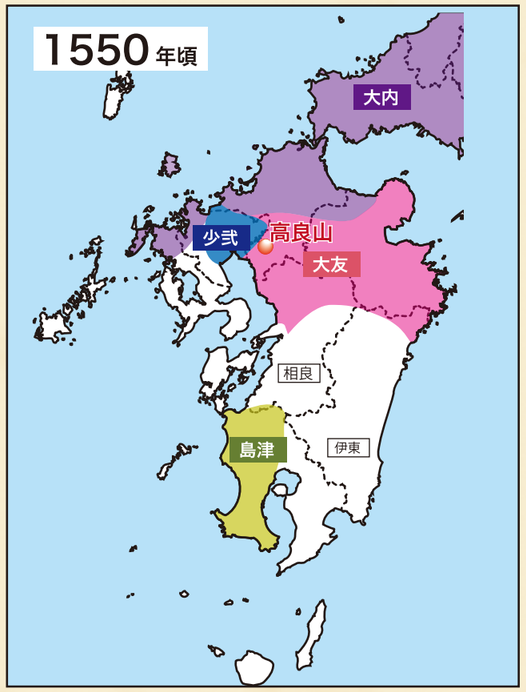
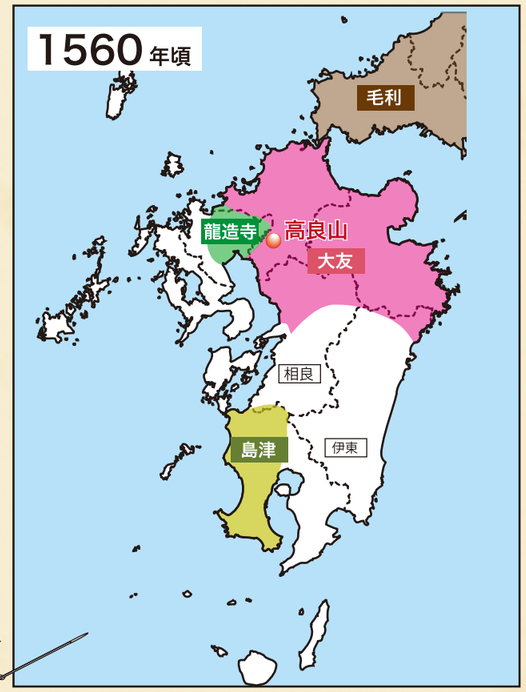
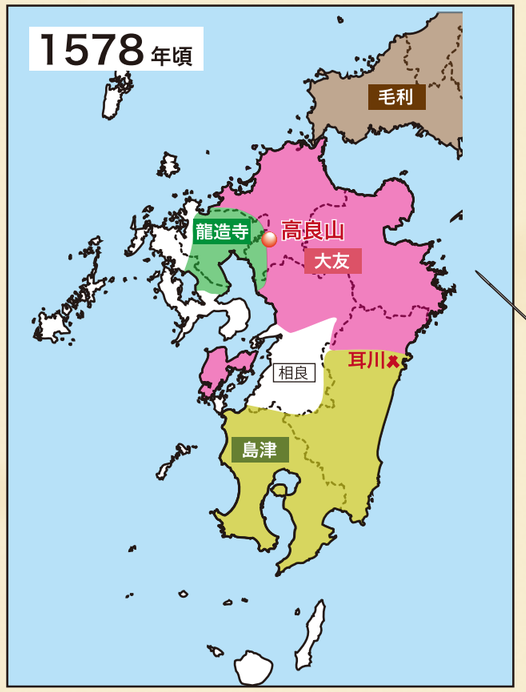
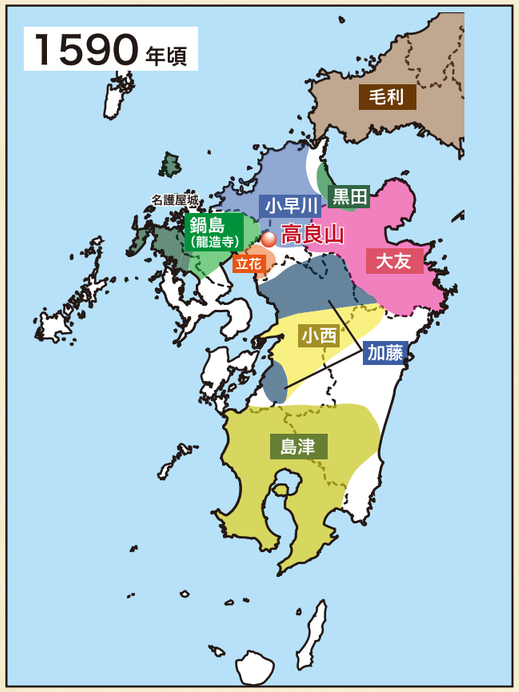
この間、大友と龍造寺の対立の中で、筑後の勢力図はめまぐるしく塗り替えられた。さらに島津が加わって、戦国大名の三つ巴は、あたかも三国志の様相を呈し、筑後はその激戦区となる。

龍造寺方では、天正12（1584）年、当主隆信が島津勢に討たれて戦死、大友方では、筑後を転戦していた戸次道雪が高良山中で病に倒れ、同13年に北野で陣没、高橋紹運も高良山を離れた。そして龍造寺方の麟圭が、高良山座主に返り咲く。

島津席巻

大友勢の撤退後、筑後は大半が龍造寺傘下に収まったのも束の間、島津勢が押寄せ、一挙にその軍門に下った。高良山では、島津勢が火を放ち、神社・仏閣そのほかことごとく焼亡したとも、麟圭以下、島津方として高橋紹運の岩屋城を攻めたとも伝わる。

九州平定と高良山

天正14（1586）年、豊臣秀吉は大友宗麟の要請に応えるかたちで、九州に軍勢を送り込んだ。豊臣軍に押されて島津勢は後退、やがて島津義久が降伏した。

高良山は、豊臣政権の下、大幅に領地を縮小されるものの存続を安堵され、新しい時代への対応を迫られることとなる。